

長谷川四郎全集

第十卷

長谷川四郎全集第十卷

一九七七年七月二〇日発行

著者長谷川四郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・一八四一(編集)

振替東京六一〇二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七七年(検印廃止)落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集
第十卷
晶文社



1 アンナ・カレーニナ 9

2 シベリヤ・ルポ

ヤクトの詩人

105

東ドイツの詩人

111

チタの詩人

116

アムール of 詩人

122

ブリヤートの詩人

128

3 シベリヤ再発見

太平洋に開かれた窓

138

バイカル湖のこちらとむこう

158

金とダイヤモンドの国

236

万古不易の流行歌

247

『一目見て憎め』

249

マクシム・ゴーリキー

251

万延元年のフットボールのボール

254

翻訳劇について

267

ゴーゴリと『検察官』

270

〈作品の背景〉『模範兵隊小説集』

273

クレンペラーの『LTI』

274

『斬られの仙太』

275

ゴヤとスペイン

277

兵隊芝居を書いているのだ

279

「長谷川四郎作品集」第四巻まえがき

280

『五稜郭血書』雑感

281

チャベック『ひとつのポケットから出た話』

282

アルマン・ガッティ序『ゲリラ戦士の日記』

284

歌うソビエト人

285

ソルジェニツィン『ガン病棟』

286

菅原克己

288

チエーホフについて

295

『トロイアの女たち』

297

春の雪考

300

『兵隊芝居』作者の言葉

302

徳留徳『ときゆめんと砂川』

303

金達寿『太白山脈』

304

兵隊芝居付録

306

かさぶた式部考考

409

フランツ・フアノン『革命の社会学』

312

兵隊芝居の台本について

314

わが友 野間宏

316

作者のノート・10

321

解題 福島紀幸

326

1

アンナ・カレーニナ

第一部

1

古い地主邸の一室。レービン、だぶだぶの百姓服を着て新聞を読んでゐる。新聞紙にかくれて顔が見えないが、やがて新聞紙をさげて顔が出てくる。

レービン　ぼくはこの家に住むレービンという者だ。人はぼくのことを進歩的な地主だなんて言う。もしぼくが進歩的だとするならば、それは土地所有権の源泉をなすものが、つねに暴力、欺瞞、権力、狡猾であつたということ、みずから知っている——という、ただこの点においてだろう。人はその出生をえらぶことができない。だが、被抑圧者たちが、自分らを圧迫する政府を暴力で打倒せよと叫び、そのように実行しようとしている者どもがおる

が、ぼくはこれに反対だ。彼らの解放の試みは権力の強化のための絶好の口実を政府に与え、権力の強化をうながすだけだろう。最も重要な問題は民衆に良心の覚醒をうながすことだ。そしてこの良心とは、すべての人間の内面に住む、あの霊的存在の認識である。ぼくは百姓たちに福音書の精神を大いに吹きこまなくてはならぬ。(新聞でまた顔をかくす。遠くで汽笛の音。レービン、また顔を出す) 汽車か。あれは呪つていいものやら、祝福していいものやら。げんに今日の新聞にも鉄道で死んだ者の記事が出ている。自殺か事故死か。以前は自殺する者は川にとびこんだものだが、今では鉄道にとびこむ。動物はこんなことはやらぬ。ぼくの愛する馬、あのグネトコは汽車にぶつかって死んだが、あれは事故死だ。かわいそうなグネトコ。だが、人間の場合はどうか。明らかに遺書があればつだが、……いや、それだつて自殺か事故死かわからないぞ。ひょっとすると他殺ではあるまいか。(再び汽車の汽笛の音。レービン、新聞をまるめて、ほうりだす。あわてる) おお、あれは下り列車の到着だ。(立ちあがり叫ぶ) ア

ガーフィヤ、アガーフィヤ。

アガーフィヤ、一抱えの服をもつて登場。

アガーフィヤ おんまえに、アガーフィヤ、まいりましたよ。

レービン 服をもつてきてくれ、新しく作った、とつときのやつだ。

アガーフィヤ それはもう、ちゃんともつてまいりました。馬子にも衣裳、レービン様にも衣裳。男やもめにウジがわく。

レービン なんだって？　へんなこと言わないでくれよ、アガーフィヤ。

アガーフィヤ レービンのダンナは嫁もとらないうちにヤモメになつてしもうた、と百姓たちが申しておりますわよ。知らぬはレービン様ばかり。

レービン いいから、服をおいて、出ていってくれ。これから着換えをするんだ。

アガーフィヤ 殿方の着換えするところを見ても、このアガーフィヤ、おどろく者じゃござんせん。服は着るためのもの、ぬぐためのもの。いいから早く着換えあそばせ。のぼり列車がもうすぐ到着しますわよ。

レービン 汽車のやつには待つとるように言つてくれ、アガーフィヤ。レービン様のモスクワのぼり、いや、モスクワくだりだ。

アガーフィヤ はい、はい。(退場)

2

レービン、口笛をふきふき着換える。暗転。
つぎの合唱、聞える。

イギリス人は利口だから

水や火などを使う

ロシア人は歌を歌い

みずから慰める

ヘーイ、ヘーイ

ヘーイ、ヘーイ

モスクワの停車場。両側にプラットホーム。中央にレール。レールの上に轢死体。プラットホームの上に人々むらがつて、つぎのような声が聞える。

○ なんだ……なんだ……どこだ……どこだ……どこだ……だれだ、だれだ。

○ どのどなたか水知らぬ人。

○ 水だ、火だ、鉄だ、鉄道だ。ナンマイダ。

○ おれ見たぞ、とびこみだ、いや、ひかれたんだ……いや、自殺だ。いや、事故死だ。

大勢の声 打って、たたいて、砕いて、練りあげて……打って、たたいて、砕いて、練りあげて……（くりかえす、合唱のごとし）

老執事（進みでる）近辺の百姓なそうでございます、奥様。泥酔しておりましたとか。この寒さを防ぐために耳をくるんでおりましたせいで、汽車の音が聞えなかつたのでございましょう、あつという間にはねとばされて、奥様。カレーニンの奥様。おや、お見えにならない。奥様、カレーニンの奥様。（呼びながら走り去る）

プラットフォームから人々消え、がらんとしている。片側のプラットフォームに旅行服姿のアンナ、カバンを手に立っている。むかひのプラットフォームは暗黒。一人の乞食、帽子をさしだし、アンナに近づく。

乞食 めぐみぶかい奥様。ご慈悲でございます。マリア様の名においで、どうぞ、ゼンコばめぐんでやって下せいまし。

アンナ あなたはどなた？
乞食 汽車にひかれた者の兄弟でございますだ。

アンナ、帽子に金をいれる。乞食、去る。
突然、アンナのそばにウロンスキイ、立っている。

ウロンスキイ 気前がよくいらつしやいますな、奥様。乞食の帽子にほんと十ルーブリ金貨。いや、感心いたしました。慈悲深いお心です。

アンナ そうでしたか知ら？ あなたはどなた？

ウロンスキイ これはゴアイサツですね。車中にて自己紹介申しあげましたよ、奥様。

アンナ ああ、あの、ウロンスキイ少尉。

ウロンスキイ 中尉でございます、奥様。

アンナ わたし、どうかしたんだわ。ごめんなさい。ウロンスキイ中尉さま。

ウロンスキイ 無理ありません。あのむごたらしい死体。突然の死。星が一つ落ちて死ぬ。デリケートな心のおびえ。奥様、いろんな死がございますよ。一つの死、二つの死、十の死、百の死、百万の死。古代ギリシヤの青年たちはジュピターの雷に打たれて死ぬのを理想としたそうですよ。

アンナ 死が理想かしら。どんな死だって、死ぬのはイヤですわ。ウロンスキイ ばくは軍人。戦場でまっさきかけて討死するのを理想としております。おや、ふるえていらつしやいますね。奥様、荷物をお持ちいたしました。どうぞ。

アンナの荷物を取り、ポーターのような恰好で、アンナのあとについて退場。同時にもう一方のプラットフォーム、明るくなる。レービン、カバンをぶらさげて、立っている。

レービン 北から東から南から百姓たちが移動している。二人、三人、四人と、その数はまだ少ないが、年毎にだんだん多くなつていくそうだ。彼らは土地をはなれ、もう先祖代々の農民ではなく、都会の労働者になる。そういえば、駅という駅に浮浪人がむらがつていたな。ころがる石にはコケが生えない。ぼくのいうコケとは、より豊かな生活と、愛の福音だ。そのためには彼らを土地からころがり出さしてはならぬ。浮浪人は無頼漢と紙一重だ。道徳も荒廃してしまう。だが、ぼくは彼らを土地にひきとめておくことができるだろうか。鉄道はますます彼らを都会へとひきつけるだろう。これが「ロシヤにおける資本主義の発達」か。祝福しているもののやら、呪っているもののやら。エイ、To be, or not to be.

暗転。再びつぎの歌。

イギリス人は利口だから

水や火などを使う

ロシヤ人は歌を歌い、

みずから慰める

ヘーイ、ヘーイ

ヘーイ、ヘーイ、ヘーイ

3

モスクワにおけるオブロンスキイの部屋。写字机、鏡など。
オブロンスキイ、部屋の中を歩きまわっている。

オブロンスキイ かなわん。とても、かなわん。さよう、ぼくは役人。職務には無関心だが、おかげで仕事に氣をとられたり、失敗をしでかしたこともない。ぼくは自由主義者だ。自由でありたいなら、自分の欲望をおさえつけろ、か。かなわん。とてもかなわん。ぼくがまずかったことはみとめるが、どうも自分が悪かったとは思えない。これがいちばんいけないことかもしれないが、自分をいつわるわけにはいかぬ。とにかく、なんとか手をうたななくては仕事も手につかん。だが、あせってもしょうがない。待つにしかず、か。すべてはアンナが来てからの話だ。どうせ完全解決なんてことはありえないが、なんとか小康をえるというやつだ。頼むぞ、アンナ。

召使、手紙の束をもって登場。

召使 御前様、本日のお手紙はこれでございます。
オブロンスキイ 御前様はよせ、ぼくは自由主義者だ。いいか、自由主義者だぞ。せいぜい、ダンナ様くらいにしとけ。

召使 はい、ダンナ様。（手紙をわたす）

オブロンスキイ、手紙の束をうけとり、一つ一つ封筒をみて、アンナからの電報をのぞき、ぜんぶはじきとばしてしまふ。

オブロンスキイ どれもこれも下らん手紙だ。人の気も知らないで。おい、きみ。今朝、アンナ・アルカジエヴナがお着きになるからな。部屋の仕度をさせておいてくれ。

召使 おひとりでいらつしやいますか。それともカレーニンの殿様とごいっしょで？

オブロンスキイ ひとりさ。なに、カレーニンの殿様だって？なるほど、あれは殿様づらするのが好きだからな。だがカレーニンは殿様じゃない。ただの役人だ。官僚だ。ぼくよりちよいと位が上で、なかなかヤリテではあるが。

召使 おひとりでしたら、お部屋は二階の奥の間にいたしましたしう。

オブロンスキイ 奥がた、ワイフ、いや、その、ドリーにきいてみな。

召使 あの、奥さまに、ですか。

オブロンスキイ そうさ。ぼくのかわいいドリーにさ。このアンナの電報をもつていって、おわたしするんだ。

召使 （傍白）なる。敵状偵察か。（正白）かしこまりました、

ダンナ様。（ちらばった手紙をひろう）

オブロンスキイ そんなものはいいいから、早くうかがってこいよ。

召使 時間割というものがございまして、奥さまの、お部屋にお茶をおはこびする時間まで、あと五分でございます。それより早くおうかがいしますと、たいそうご立腹になりますので。

オブロンスキイ ますますもって、ご機嫌ななめか。

召使 そりやもう、奥さまはお部屋におとじこもりになり、夜の目も寝ずに、ひたすらダンナ様の身を心心配のようで。どうもちかごろダンナ様のお顔色がすぐれませんの。

オブロンスキイ なんだって？ ぼくの顔色がわるいって？ そりやほんとか。

召使 いえいえ。ひじょうにご立派でございます。ただ、今まであまりによろしかったものですから、ちょうどよくおなりでございます。ウレイ顔の紳士といった感じで。

オブロンスキイ （傍白）召使という者は家の中の劇をなんでもかんでもよく知っている者だ。（正白）そうか。さぞかし、きみは召使部屋で女中たちと、ぼくのことをあれこれウワサしているだろうな。盗聴器をつけて、ときどき、きいてみたくなるよ。

召使 盗聴器なんて、まだわがロシアにはございません。ごじゅうだんを。しかしダンナ様、いくら文明が進みましても召使は召使。ただただ、ダンナ様のためによかれかしと、そう思っているだけでございます。

オブロンスキイ いやいや。そんなことはない。きみだって、そ